

地域と社会の一員として

太陽の家

太陽の家は1965年から半世紀以上にわたり、大分県別府市を拠点として、障がいのある人の仕事と生活、スポーツをサポートしています。“No Charity, but a Chance!”(保護より機会を)を理念とし、創設以来障がいのある人の自立を目標に働く場づくりに取り組んできました。

太陽の家では就労のための訓練だけでなく、雇用型の支援も行っていきます。直接運営する施設の他、オムロン太陽、ソニー・太陽、ホンダ太陽、三菱商事太陽、デンソー太陽、富士通エフサス太陽といった共同出資会社や協力企業など、一人ひとりが就労を通して能力を發揮できる環境を提供し、経済的な自立と自己実現をサポートしています。

1977年から営業している敷地内のスーパーマーケットサンストアは、広い通路や低めの棚、昇降式のレジ台など、従業員にもお客さまにも使いやすくなっています。太陽の家関連施設だけではなく、別府市内の飲食店やパチンコ店では、車いすユーザーが利用する際は椅子を外して利用できるようにするなど、地域に暮らす人々の心にもバリアフリーが根付いています。太陽の家が50年以上に渡り築いてきた、一人ひとりそれぞれの能力を活かせる環境、そして地域との関係性は、多様な人々が共生していくこれからのまちの姿を予見させます。



画像提供：
社会福祉法人 太陽の家
HP：http://www.taiyonoie.or.jp/



就労継続支援 A 型
別府工場(製業機器部品の組立)
協力:オムロン太陽株式会社



創設者
中村裕(右)
1978年
大分県身体障害者
体育大会にて

社会と つなぐ

人を通して障害を識る

フリーペーパー gente

必要なのは「識る機会」

「障害は社会にあり、それに直面する人が障害者」gente編集部はそう考えています。その体験や日常から社会にある障害を識り、気づきを得る。もちろんそれは「その人の場合」であって、社会の障害全てを網羅するものではありません。しかしその人の場合を識れば、他の人の場合も想像できるようになります。何も知らないままでは、「自分と違う他者」について想像もできません。まずは断片的にでも「識る機会」が必要なのです。

なぜ、フリーペーパーなのか

無料の紙媒体で発行する理由は、「無関心から関心へ」という活動ビジョンに基づいています。web媒体は容易に拡散力のある情報発信が可能ですが、その情報に関心のない人には届きにくい、という側面があります。ですがフリーペーパーなら「たまたま、偶然に」その情報と出会う可能性を創出できる、と考えています。ネットで目当ての本をすぐに購入できても、実際の書店に足を運ばばそこには思いもよらない本との出会いがあり、つい手に取ってしまう。わたしたちもそのように「無関心な人」にこそ、genteと出会ってほしい」との想いを込めて、フリーペーパーという媒体を選択しています。



文・画像提供：gente 編集部
HP：https://www.gentepaper.org/



Vol.004:義足/義足の
外装を外すに至った
気持ち。義足の仕組みや
さまざまな義足も紹介。



Vol.009:軽度知的障害/
仕事への取り組みや
苦手な事について。
保護者への
インタビューも。



Vol.008:義手/義手の
動かし方や、道具の
使い方の工夫、幻肢痛に
ついて。



Vol.011:視覚障害(全盲)/
暮らしの中の素朴な
疑問を、学生目線で質問。
ブラインドサッカーに
ついて紹介。

日本バラの父、中村裕と太陽の家

太陽の家創設者で整形外科医の中村裕は、1960年代当時、「安静」が治療の中心だった日本では未開拓のリハビリテーションについて英国留学等を通して学び、スポーツを医療に取り入れました。逆風の中で開催に尽力した1964年東京パラリンピックでは、外国の選手がそれぞれ仕事を持っていることに衝撃を受け、「身障者が自立できる施設を作る」という決意が太陽の家の構想につながりました。太陽の家では創設当初から入所者のスポーツ活動を推進し、現在では陸上、車いすバスケットボール、車いすテニス、車いすツイニングバスケットボール、ポッチャ、卓球などさまざまなパラスポーツが取り組まれています。また中村裕が提唱した「大分国際車いすマラソン大会」(1981~)など、多くの人へ開かれたスポーツへの入口は今も受け継がれています。



技術で ささえる

日常を支える技術で競う サイバロン

サイバロンは、障がい者と先端技術の開発者が協力して日常生活に必要な動作に挑む国際競技大会を軸にした、スイス連邦工科大学チューリヒ(ETH Zurich)発のユニークな取り組みです。競技種目は脳コンピュータインターフェース(BCI)、機能的電気刺激(FES)自転車、パワード義手、パワード義足、パワード外骨格(エクソスケルトン)、そしてパワード車いすの6つ。2020年大会のパワード義足レースでは、ものを運びながら障害物を通り抜ける完成度とタイムを競い、日本からBionicMが出場しました。例えば、電動義手で洗濯物を干す。電動車いすで階段を昇り降りする。アシスト技術を使うことにより、障がいを持つ人の日常生活はより快適になり得る、という想いがサイバロンの出発点です。競技大会に注目が集まりがちですが、それだけではありません。

1. キーワードは「日常生活」。競技の課題も、日々の生活に必要な動作ばかりです。
2. さらに使いやすい技術を開発するために、技術者と、(技術を操縦する方という意味で)パイロットと呼ぶ障がいのある人たちが共同で開発にあたります。
3. そして大会を通じて、技術や障がいに関心のない方々にも興味を持ってもらうことを目指します。そのうえで、障がいのある人たちに促すことでの日常生活における平等や、社会参画について対話を促します。

参加・観戦する人を巻き込んで、技術とダイバーシティへの関心を後押ししています。

移動の未来を拓く

BionicM

「パワード義足」とは、義足自体が動力をもち、センサーなどによってユーザーの動きを助けてくれる機能を持つ義足のことです。例えば電動自転車のように、モーターの力でユーザーの動きをサポートし、身体への負担を少なくすることができます。BionicMはロボット技術を活用し、すべての人々のモビリティ(移動)を向上させるための技術を開発するスタートアップ企業です。設立者の孫小軍は幼少期に足を失い、松葉杖や義足を活用して生活してきた自身の経験から、東京大学在学中に二足歩行ロボットの技術を応用してパワード義足を発明しました。従来の義足の課題を解決するために、2018年から株式会社としてパワード義足の開発を行っています。電車や、飛行機、ロケット、あるいは靴やエスカレーターといった技術が人々の「移動」を広げていったように、BionicMはロボット技術の力ですべての人の移動に力を与えることを目指しています。身体的な問題により移動の制限がある人、高齢者や健常者までを含めた「すべての人々のモビリティにパワーを Powering Mobility for All」をミッションとし、人々がよりスマートに、楽にどこにでも移動できるソリューションとその関連サービスを提供するモビリティカンパニーとして開発を続けています。



画像提供：BionicM
HP：https://www.bionicm.com/



2020東京大会パワード
車いす部門より
◎ 越智貴雄/カンパラプレス



2020東京大会パワード
義足部門より
◎ 越智貴雄/カンパラプレス



画像提供：
在日スイス大使館 科学技術部/
スイス連邦工科大学チューリヒ(ETH Zurich)
サイバロン2020世界大会
(スイス大使館 科学技術部) HP：
https://stoffictetokyo.ch/cyathlonseriesjp-main